山形大学男女共同参画推進室　第12号 2013

Office for Gender Equality, Yamagata University

NEWS Letter

未来につなげる女性研究者の育成
～平成24年度山形大学男女共同参画シンポジウムから～

11月19日（月）、小白川キャンパス理学部S401教室で山形大学男女共同参画シンポジウムを開催しました。平成23年11月に、県内5高等教育機関の運営関係者を中心として採択された「男女共同参画に向けた大学連携・山形宣言」から丁度1周年を迎えた今回は、大学コンソーシアムやまがたと共催での開催となりました。11機関から68人、学部生・大学院生17人、一般の方16人、合計101人が参加し、結城章夫山形大学長、遠藤恵子山形県立米沢女子短期大学長の挨拶のあと、女性研究者育成に向けた講演やパネルディスカッションが行われました。

1. 基調講演「女性研究者育成のこれから」

小舘香椎子氏の基調講演

小舘香椎子氏 (独)科学技術振興機構男女共同参画主監、日本女子大学名誉教授

3人のお子さんを育てながら光エレクトロニクスの研究を続けてこられた小舘先生は、特許数も10以上に上るなど顕著な成果を上げながら、各種学会委員や政府委員を歴任されてこられました。平成20年の日本学術会議提言「学術分野における男女共同参画促進のために」では、その中心メンバーとなっておられます。

基調講演の中で、育成を目指す女性研究者像は、「国際社会で活躍できるバランス感覚のある女性研究者／オピニオンリーダー」であり、その育成の3本柱は、1. 多様でイノベーションにつながる研究の推進、2. 指導（教育）能力の習得・向上、3. 研究室運営を含むマネジメント・スキルの向上、であると述べられました。さらに、女性の研究成果の「見える化」に向けて競争的資金への積極的応募と国際共同研究・交流への参加を推奨されるなど、エールを送っていらっしゃいました。

2. 取組紹介「広がる女性の育成と活躍」

次に、県内3機関から3人の方の取組紹介がありました。まず、平成24年度SPP（サイエンス・パートナーシップ・プロジェクト）に採択された山形県立山形西高等学校の「山西リケジョプロジェクト」の担当教諭 佐々木隆行氏から、理系女子生徒の進路選択の幅を広げる試みとして研究室訪問が報告されました。理系クラスの女子生徒の進路選択が看護医療分野に偏り過ぎており、厳しい競争と敗者を生み出し、未来をリードする理系の人材を失っているのではないかという懸念がプロジェクトの背景にあるということです。

次いで、史上最年少で杉田玄白賞を受賞し平成24年度専門学科で初の女性教員として採用された鶴岡工業高等専門学校物質工学科助教の平尾彰子氏から「食事が薬になる科学」と題して研究状況の報告がありました。これまで研究を続けていく上でメンターの存在が大きく感謝しているということでした。

最後に、2人の男の子を子育て中の山形大学理学部の井深章子准教授から、「仕事と子育て～その現状について～」と題して報告がありました。学部生の時に、動く画面でタンパク質の構造を見た時の感動が大きく、それ以来、タンパク質の構造解析と性質を研究しているということです。出産と夫の海外赴任の際の退職や常勤から非常勤への変更など、プライベートとリンクして仕事を変えざるを得なかった状況があったが、女性研究者支援が始まって勇気づけられているということでした。

3.パネルディスカッション「男女共同参画に向けて」

取組紹介を受けて、後半は東北公益文科大学教授 伊藤眞知子氏の進行により、山形西高等学校長 阿部和久氏、鶴岡工業高等専門学校副校長 宮崎孝雄氏、山形大学男女共同参画推進室 木村松子チーフ・コーディネーターをパネラーとして、女性の育成や支援についてパネルディスカッションが行われました。理系女性研究者を増やすために、さらに中学校との連携も必要であるなど、参加者との質疑応答も含め充実したディスカッションとなりました。

最後に、小舘氏から、「高等学校や工業高等専門学校の取組みを知り、また校長先生方の熱心なお話を聞き大変心強く感じた。これまであまり聞く機会のなかった取組みなので期待したい。」というコメントがありました。また、「研究継続支援員制度など大学の支援を受けた研究者には是非成果を上げていただきたい。また、研究支援に携わった学生の成長も望みたい。」という励ましがありました。

平成24年度学長・学部長と女性研究者との懇談会

地域教育文化学部　会場：地域教育文化学部小会議室

8月1日(水)
11:30~13:00

地域教育文化学部懇談会　14人参加

結城学長から、2年前に策定した男女共同参画基本計画は10年計画であり、着実に、あきらめず、しぶとく続けていくつもりであり、10年後には、男女共同参画と言わなくてもよいような組織文化にしていきたい、という挨拶がありました。

伊藤副学部長の進行による懇談の中で、本学部では女性教員が増えていないことをもっと真剣に考える必要がある、会議の設定を工夫しないと事務職員に大きな負担をかけている、という意見が出されました。また、学部改組で残業が続き、保育園に迎えに行けなかったり、体調を崩したりしたという体験談も出され、各人の担当を超えた業務の分担は可能であり、工夫してほしいという説明がありました。那須学部長から、山形大学の男女共同参画は速いスピードで取組みが進んできた。今後、ワークライフバランスの実現に向け、超過勤務を減らすなど努力を続けたい、という挨拶がありました。

農学部　会場：農学部会議室

8月9日(木)
14:45~15:45

農学部懇談会　18人参加

学長・北野室長の挨拶の後、阿部副学部長の進行で懇談会が行われました。女性研究者から、育児期の研究継続支援員制度やメンター制度などは無くてはならないものになっていること、また、このような支援制度があることを学生のうちから知らせておく必要があるとの意見が出されました。また、女性研究者裾野拡大セミナーに関して、男性教員ももっと企画の段階から参加したり、学生にも呼びかけてほしいなどの意見も出されました。

最後に、西澤学部長から、男女共同参画推進は今後も考えていかなければならないことであり、予算措置するものとしないものを精査して進めていきたいという挨拶があり閉会となりました。

工学部　会場：工学部100周年記念会館セミナールーム

10月1日(月)
14:30~15:30

学長と室長から大学の取組状況を混えた挨拶の後、神戸副学部長の進行で全員の自己紹介と以下のような自由な意見交換が行われました。

「工学部に来た当初、研究室の近くに女性用トイレがなく困った。妊娠中は和式トイレは大変だ。洋式トイレが少ないと思う」、「子育て期の教職員に対しては、職場に近い駐車場を配分するなど配慮してほしい」、「会議は勤務時間内に終了させてほしい。このようなお金をかけないでもできる支援は積極的に進めてほしい」等。

これらの意見を受けて最後に飯塚学部長から、気付かないことがいろいろあることが分かったので、トイレや駐車場の配分など施設面のことは見直しを行っていきたい旨述べられました。

工学部懇談会　19人参加

基盤教育院　会場：基盤教育棟会議室

11月19日(月)
11:10~12:10

女性研究者から、学会出張時の託児支援制度はよい制度だと思うが、学会の前後にある研究会や打合せにも利用できるとありがたい、女子学生へのロールモデルの提示ということで、女子学生と女性教員との交流の場があるとよいのではないか等の意見がありました。また、昨年度採用された女性研究者から、女子学生の相談を受けることがよくあった。基盤教育院は女性教員が多いので私も助かっている、という感想がありました。

最後に渡邊基盤教育院長から、このような意見交換のできる場は、これからも必要である旨述べられました。

基盤教育院懇談会　15人参加

農学部ランチミーティング開催

日時：11月30日(金) 12:00 ～ 13:00　会場：農学部会議室

育児中又は将来出産・育児を考えている教職員を対象に、仕事と生活を両立する上で日頃感じていることなど、自由な情報交換を目的として開催されました。今回は、教員、事務職員それぞれ男女1名ずつから話題提供があり、その後、意見交換が行われました。夫にも育児休業を取ってほしかったが難しかった。保育園からの呼び出しなどで早退しなければならない時に周囲の理解を得にくい、男性も女性も同じように悩んでいる、などの話が出され環境改善に向けて相互理解を深めることができました。

平成24年度女性研究者裾野拡大セミナー

理学部

7月27日(金)
16:20~18:00

「20年の味覚研究を通して見てきたもの・見えてきたもの」

会場：理学部12番教室

農業・食品産業技術総合研究機構食品総合研究所の日下部裕子氏を招き、セミナーを開催しました。味覚の先端研究について、研究者になるまでの道のり、研究職と他の職業との違い、女性にとっての出産のタイミングや仕事との関係について講演いただきました。日下部氏から、第二子を産むときに迷ったが友達に相談したところ、「子育ても仕事も全部うまくいくなんて夢」と言われて割り切ることができ、産む決心をした、というお話がありました。29人の参加があり、男性にとっても具体的でためになる話だった、という感想が寄せられました。

日下部裕子氏講演

12月15日(土)
13:30~

「DNAでわかる生き物の暮らし―クマの数をかぞえる―」

会場：理学部S401教室、各研究室・実験室

山形西高等学校の2年生理系クラス女子生徒81人を迎えて、生物学科の玉手研究室、物理学科の佐々木研究室、物質生命化学科の天羽研究室・大谷研究室の見学と学生・院生の支援による実験体験や講義が行われました。自分の遺伝物質DNAを取り出しペンダントに入れる実験や、赤外分光の体験、発泡スチロールを溶かすリモネンをみかんの皮から抽出する実験等を体験しました。全体講義では、出生前診断を題材として科学技術の可能性や問題点を学んだり、ゲームを通して理論を学んだり、理系の勉強をする必要性や楽しさに触れる機会となりました。

DNAを取り出す実験

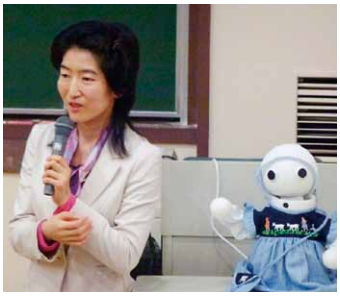
工学部

10月25日(木)
16:00~17:30

「やわらかい機械と機会をつくる」

会場：工学部中示範B教室

千葉大学大学院准教授の大武美保氏の講演が行われました。県立米沢興譲館高等学校1年生と2年生理系クラス・理数科クラスの女子生徒計114人と大学生30人が集まりました。「機械」は硬い印象を与えますが、「やわらかいロボット」や「手触り」など、優しくて繊細な研究分野もあり、女性研究者が活躍していることが紹介されました。実際に動いたり話したりする会話支援ロボット「ぼのちゃん」が紹介され、関心を集めていました。



大武美保氏と「ぼのちゃん」

12月15日(土)
13:30~

宇宙飛行士 山崎直子さん講演会
『宇宙・人・夢をつなぐ～未来へはばたくみなさんへ』

会場：山形県立米沢興譲館高等学校 講堂

平成24年度SSHに指定された米沢興譲館高等学校主催、山形大学工学部と男女共同参画推進室共催で山崎直子氏を迎え、講演会が行われました。全校生徒600人と保護者、工学部学生等合計約800人が集まりました。山崎氏は、2001年に30歳で宇宙飛行士の訓練に参加し、2010年4月にスペースシャトル「ディスカバリー号」に搭乗、16日間の任務を終えて無事地球に帰還しました。これまでの宇宙飛行士約500人中約1割が女性だということです。宇宙に行ってみて、上下の感覚は1つの見方であって絶対軸ではないことや一つの方向から見ていたことに気付いた等、興味深い話に参加者は引き込まれました。

山崎直子氏講演

農学部

7月27日(金)
14:00~16:00

「研究者になるということ～男と女で違いはあるの？～」

会場：農学部1号館会議室

（独）国際農林水産業研究センターの鳥山和伸氏から「研究も料理もクリエイティブだからこそ面白い！…地図とメニューに乾杯」、（独）中央農業総合研究センターの佐々木香織氏から「私の研究者人生」と題してそれぞれ講演がありました。

鳥山氏から、女性研究者の活躍が増えてきたのは支援制度の後押しも大きな要因であるというお話がありました。佐々木氏からは出産・育児期の話があり、育児休業中の代替職員について質問が多数寄せられました。

佐々木香織氏「私の研究者人生」

女性研究者からの **The Message**【第12回】◎山形大学の女性研究者を順次紹介しているコーナーです

関亦 明子 先生

山形大学医学部基礎看護学准教授

◎どんな研究をされていますか。

私たちは唾液や消化液等、いろいろなものを分泌して生きていますが、細胞内タンパク質輸送、つまり分泌機能の研究をこれまでしてきました。また、留学先では乳がん遺伝子を探索するプロジェクトにも参加していました。現在は、過去のこのふたつのテーマが融合した形で、がん細胞の増殖機構をタンパク質輸送の観点から追求しています。こちらのほうはもう少しで区切りがつきそうなので、新しいプロジェクトを始動しようと計画しているところです。せっかく看護学科にきましたので、これまでの研究経歴を活かして、がん治療における有害事象を軽減する研究を行って、治療を受けている方が少しでも前向きに治療に取り組めるような看護の視点ならではの基礎研究をして行きたいと思っています。

◎研究の道に困難はありましたか。

私のように看護出身で基礎研究を志す人は全国的にみるとまれで、よいロールモデルもないなかで、自分が将来どういう道を歩んで行ったらよいのかはじめは全く検討がつきませんでした。研究の道で生きて行くことに迷いはありませんでしたが、大学院生時代は将来が不安で夜中に眠がさめることもしばしばでした。研究室には医学、薬学、理学、農学部など、理系出身の先輩後輩、友人ばかりでしたので、自分の知識のなさに落ち込み、必死で勉強していました。その時代に知り合った現在の夫は、免疫関係の研究者で、今でも私が迷った時にはしかってくれて、私が道をはずれないようにサポートしてくれています。学位取得後はポスドク等も経験し、アメリカへの留学も経て、研究者としてやっていくことに自信も芽生えてきました。留学先のボスが女性であり、家庭も大事にしながら研究室を運営している姿をみて、よいロールモデルもみつかりました。大学院生時代からポスドク、現在の教員生活にいたるまで、女性だからということで不利に感じたことはありません。これも先輩方の努力、家事の得意な夫、指導教官や同僚に恵まれたおかげだと思い感謝しています。

◎若き研究者へのメッセージ

現在では私が王道を歩んで来たかのように言われることもあるのですが、私自身は傷だらけになりながら道なき道を歩んできたという思いです。王道というものはなくて、誰でも自分だけの道を探すしかないのではないでしょうか。私は基礎研究と臨床看護というトランスレーショナルな領域に自分の居場所をみつけつつありますが、みなさんも自分の専門性を磨いて、自分を活かせる場所をみつけてほしいと思います。

Information 1 人文学部 学長・学部長と女性研究者との懇談会

平成25年1月9日(水) 11:00~12:00

●場所：人文学部第二会議室（2号館2階）　●対象：人文学部教職員（男女を問わず）

ワークライフバランスの実現に向けて、日頃感じていることや要望等、率直な意見交換を行います。女性教職員の方はもちろん、男性教職員の参加も歓迎します。

Information 2 科学技術振興機構の出産・子育て等支援制度をご存じですか。

本制度は、研究者がライフイベント（出産・育児・介護）に際し、キャリアを中断することなく研究開発を継続できること、また一時中断せざるを得ない場合は、復帰可能となった時点で研究開発に復帰し、その後のキャリア継続が図れることを目的としており、戦略的創造研究推進事業と研究成果展開事業にて実施しています。（平成25年度以降、他の事業にも拡大予定。）

内　容

1 男女共同参画促進費は、年間300万円を上限とし研究開発課題等に支給します。
2 男女共同参画促進費は、研究開発費としての使途の範囲内で、かつ当該研究員による研究・開発を促進する、または負担を軽減することに資するもの（例：実験補助者の雇用、研究開発促進のための消耗品、機器類購入等）を優先することとします。
3 本制度におけるライフイベントの対象は、①妊娠中、②小学校入学前までの子を育児している、③介護の事由が継続的にある、こととします。妊娠中の場合には、出産後も引き続き研究開発課題等に復帰し、研究開発活動を継続することが前提です。
4 支給期間は、本制度適用になった日から年度末までとします。ただし、引き続き支援が必要な場合には次年度募集の際に再度申請することができます。なお、ライフイベントの事由が喪失した場合には、その時点をもって打ち切りとします。

応募の要件

本制度を実施しているJSTの事業に参加し、その研究費・開発費（直接経費）により研究員として専従雇用されている方、または専従雇用される予定であり、かつ、妊娠中もしくは育児（小学校入学前までの子の育児）や介護に主として従事しつつ研究開発活動を継続している方が応募することができます。

【問い合わせ先】独立行政法人科学技術振興機構　経営企画部　男女共同参画担当　TEL:03-5214-7467　E-Mail:kyodo@jst.go.jp

編集後記／明けましてお目出度うございます。皆様のおかげで、採択事業終了後も全学部等での取組みが順調に進められております。今年度から女性研究者支援に加え、全教職員のワークライフバランスの実現に向けて本格的に取り組んでおります。本年もどうぞよろしくお願いいたします。（2013年1月）

山形大学男女共同参画推進室
〒990-8560 山形市小白川町一丁目4-12　TEL 023-628-4937、4938、4939
E-mail danjo@jm.kj.yamagata-u.ac.jp
http://www.yamagata-u.ac.jp/kenkyu/danjo/

リサイクル適性Ⓐ この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。